

論 文

## 高知県の文化振興に資する彫刻作品の実践研究

### －井上ワイナリーのいち醸造所をフィールドとして－

Practical Research on Artworks of Structures that contribute to Culture Promotion  
in Kochi Prefecture : Inoue Winery Noichi Jouzoujo (Vinification) as a Base Site

阿部 鉄太郎（高知大学教育学部）

ABE Tetsutaro<sup>1</sup>

*1 Faculty of Education, Kochi University*

#### ABSTRACT

This paper is practical research to enhance culture promotion in Kochi Prefecture through artistic activities that were performed in the area of Inoue Winery Noichi jouzoujo (vinification). The first chapter of this paper is a review of the development of artistic activities that the author engaged in at Inoue Winery Noichi jouzoujo, such as the creation, installation and appreciation of artwork of sculptures, and the implementation of an art workshop. The second chapter describes the conception of the creation of the sculptures. The third chapter construes the production process in the work of creating the sculptures. In the fourth chapter, artistic activities that contribute to the culture promotion in Kochi Prefecture are discussed through the appreciation of the artwork of sculptures and the practice of the art workshop. The fifth chapter summarizes this study and states the further tasks of requiring the continuous art appreciation for sculptures and art workshop.

## I. はじめに

本論では、「井上ワイナリーのいち醸造所」に設置された2点のレリーフ彫刻や、施設内で自由に展示入れ替えできる仕様の小品彫刻について取り上げる。これらの彫刻作品が、当該施設で展示利用される様子を観察し、高知県の文化振興に資する彫刻作品として有用に活用される方法を実践的に考察する。

2022年4月末、「井上ワイナリーのいち醸造所」（井上石灰工業株式会社）は高知県香南市野市にグランドオープンした。筆者はその施設ファサードを飾る2点のレリーフ彫刻の制作依頼を受け、約1年の制作期間を経て設置した。井上石灰工業株式会社と高知大学は包括的連携協定を締結しており、その一環として本研究は位置付けられている。施設内で自由に展示入れ替えできる仕様の小品彫刻については、前述のレリーフ彫刻と並行して制作した。

本論での考察を進めるにあたり、まず第II章と第III章で筆者の制作した彫刻作品の制作過程を報告した後、第四章において、彫刻作品の展示利用を通じた文化振興に資する具体的な取り組みを紹介し、その効果について検証する。

## II. 作品の構想

2021年4月、筆者は「井上ワイナリーのいち醸造所」のファサードを飾る2点のレリーフ彫刻の制作依頼を受け、現地調査をした。施設は2021年2月に竣工しており、レリーフ彫刻をはめ込む枠が既に用意されていた（写真1）。この枠内におさまるレリーフ彫刻を制作することになるのだが、現地調査の結果いくつかの条件が明らかとなった。



写真1 レリーフ彫刻の設置予定場所

まず、写真1の意匠は石灰石で構成されている。そのため、枠内は常に強いアルカリ性の状態が予想される。ブロンズ素材など、アルカリ性により腐食・変色の影響を受けやすい素材による造形は困難である。次に、壁面耐重量の課題がある。比較的軽量の素材でレリーフ彫刻を造形する必要がある。その結果、素材はセラミックスおよびFRP（強化繊維プラスチック）を選択することにした。

レリーフ彫刻の設置予定場所の寸法を計測し、実寸の型紙をつくり、そこへレリーフの図案を描いた（写真2）。レリーフ彫刻の設置予定場所は2カ所あるため、一対のレリーフ彫刻となるようにした。写真2左側の図案では、2本の葡萄の木にみどりの果実、そこへ集うハチドリと蝶を描いている。このレリーフはセラミックスで造形することにした。井上ワイナリーがワイン用葡萄を県内で栽培する主要な農場（稲生・山北・手結・市村）の土を陶土に練り込み、テロワールの造形表現を試みる。また、葡萄の葉は、実際に農場から採集した4種類の葉「エイトゴールド」「富士の夢」「コベル」「マルスラン」を観察し、写生をして形態の特徴を分析した（写真3）。

写真2右側の図案は、ローマ神話にあるワインの神・バックスを表している。こちらのレリーフはFRP（強化繊維プラスチック）で造形することにした。



写真2 レリーフの図案

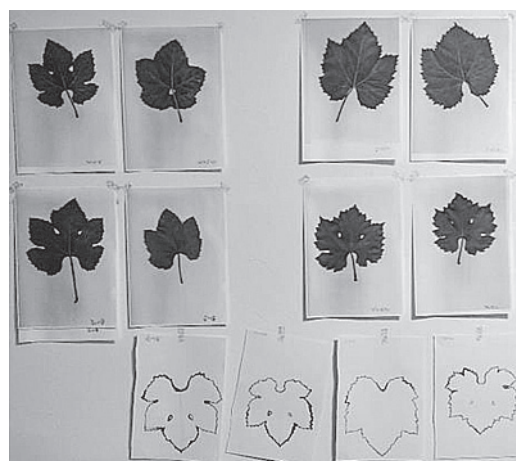


写真3 4種類の葉を観察した写生の様子



### Ⅲ. 作品の制作

セラミックスでのレリーフ彫刻を制作する前に、まず素材の準備が必要である。今回、井上ワイナリーの主要な農場（稲生・山北・手結・市村）の土を陶土に練り込むことから、これら4つの農場より農土を採取し、それぞれ粘土質の部分を抽出した（写真4）。

その後粘土質の農土はそれぞれ陶土(本業土)に練り込み、粘土をなじませるために1か月程度容器の中で寝かせた。



写真4 農土の粘土質の部分を抽出する様子

1か月程度粘土を寝かせた後、図案に従って陶板の造形に取り組んだ。ここで注意すべき点は粘土の収縮率である。陶板は最終的に1220℃の酸化焼成で焼き上げるため、粘土成形時よりも収縮する。その収縮率を測定し、収縮を想定して大きめに成形する必要がある。いくつかのテストピースを計測した結果、今回使用する粘土での成形比率は約113%となることがわかった。具体的には目標寸法（1220℃による酸化焼成後の寸法）で描いた型紙の図案を113%で拡大印刷し、その大きさに従って成形した（写真5）。

板状に成形した粘土は、急激に乾燥させると形が反るため、表面に新聞紙を複数枚重ね、1か月かけてゆっくりと日陰乾燥させた。



写真5 目標寸法よりも113%拡大して成形する様子

十分に日陰乾燥をさせた後、800℃で素焼きをした。その後、陶芸用下絵具（ベルベット下絵具・ホワイト）を刷毛で塗り、さらに白マットに仕上がる釉薬を2回ほど刷毛で塗布した（写真6）。



写真6 陶芸用下絵具を施した後に施釉する様子

陶芸用下絵具と釉薬の塗布が終わった後、1日ほど自然乾燥させてから、電気陶芸窯内に窯詰めし、内蔵のプログラム制御装置を用いて1220℃による酸化焼成をおこなった。陶板と電気窯内の棚板との接着を防ぐため、棚板上面にアルミナを十分塗布して焼成した。焼き上がり後、釉薬の具合を確認し、不十分な部位に再度釉薬を施して、再度焼成した（写真7）。

このレリーフ彫刻は屋外設置となるため、強い日差しや風雨、特に夏・秋は台風の影響を強く受けることになる。適度な釉薬を施すことで、強度の増強が期待でき、さらに汚れ防止にもつながる。一方、あまり釉薬を厚く施し過ぎると、彫刻本来の持ち味であるエッジが失われる。厚すぎない適度な施釉が、今回重要なポイントとなった。様々なメーカーの釉薬を試した結果、今回は、薄い施釉でも十分な皮膜効果のあるアメリカ製釉薬を選択した（写真8）。



写真7 窯詰めの様子



写真8 窯出し後の様子



次に、FRP（強化繊維プラスチック）でのレリーフ彫刻の制作について述べる。手順は、粘土原型の成形、石膏雌型の作成、FRP 作業、着色作業となる。粘土原型の成形では、目標寸法と同じ大きさの土台を粘土でつくり（写真 9）、その粘土表面へ図案の描かれた型紙を押し当て、図案の輪郭線を粘土に転写した。転写した図案を手がかりに、少しずつ凹凸をつけ、遠近法を意識しながらモデリングを進める（写真 10）。具体的には手前のものを厚肉彫りで造形し、奥のものをスキアッチャート（薄肉彫り）で造形することで、レリーフの画面上に立体感と奥行きを与えた。こうしてレリーフ全体の量感の調和を意識し粘土原型を完成させた（写真 11）。

粘土原型の表面に水でといた石膏を少しずつふりかけ、石膏が硬化したらそれを更に繰り返して、厚み約 5 mm～1 cm の石膏雌型を作成した。針金や垂木で補強した石膏雌型を粘土原型から引き剥がし、水でよく洗浄した（写真 12）。

その後約 2 週間乾かして水気をとばし、FRP 離型剤（今回は CMC を使用）を 2 度塗りし、更に約 2 週間日陰で乾燥させた（写真 13）。

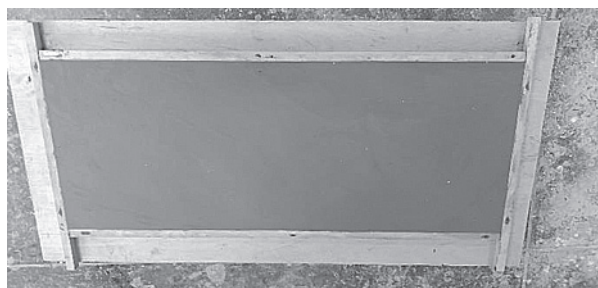


写真 9 レリーフ成形のための土台



写真 10 モデリングの様子



写真 11 粘土原型完成



写真 12 針金と垂木で補強した石膏雌型



写真 13 FRP 離型剤の塗布

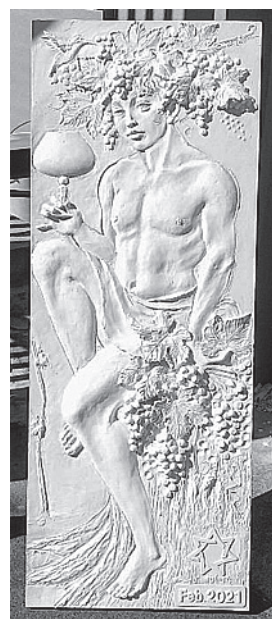


写真 14 FRP に塗装

FRP 離型剤が十分に乾燥したところで、石膏雌型内側にノンパラフィン樹脂をタルクで充填・攪拌したものに硬化促進剤を加え、約 1 mm の厚みで少しずつ塗り込み、途中からガラスマットとともに積層していった。屋外環境に耐えられる十分な強度となる厚み（本作ではおよそ 5 mm）に達したところで、鉄筋で更に補強をし、その後石膏雌型の部分だけを割り出して FRP を取り出す。こうして粘土から FRP に材質転換されたレリーフを、屋外の紫外線で経年劣化させないよう、屋外造形物用の特殊な塗料で塗装した（写真 14）。

完成したセラミックスおよび FRP のレリーフ彫刻は、施工業者の協力で 4 月上旬に設置場所へ取り付けられた。どちらのレリーフ彫刻も、取り付けの際はステンレス製の土台を取り付け場所へ先に装着し、その上へ固定することになった。セラミックスのレリーフ彫刻の取り付けに際しては、吊り下げフックと接着剤でステンレス製の土台に計 8 枚の陶板を下段から上段へ 1 枚ずつ順に固定した。FRP のレリーフ彫刻は、ステンレス製の土台へボルトで固定した。



最後に壁とレリーフ彫刻の隙間をシリコンゴムで目止め処理し、設置作業は完了した（写真15）。



写真15 設置場所へ取り付けられた2点のレリーフ彫刻

#### IV. 作品の公開およびその後の展開

本研究の目的は彫刻作品の実践的な活用による高知県の地域文化の振興と活性である。彫刻作品を実践的に活用する方法として、筆者は2つ考えた。それは「彫刻作品のSNS利用の促進」「彫刻作品に関連した参加型ワークショップの実施」である。

「彫刻作品のSNS利用の促進」は近年、公益社団法人日展が主催する日本美術展覧会（日展）において率先的に取り組まれている。そこでは鑑賞者が展示作品を撮影した画像（撮影許可のあるものに限る）をキャプション掲載するなどの条件付きで自身のSNSへ自由に活用できるようになっている。本研究で取り上げる筆者のレリーフ彫刻においても、設置場所である井上ワイナリーのいち醸造所の広報の方針に同意するかたちで、来所者による自由な撮影、SNSなどへの掲載、情報の拡散を筆者は広く承認している。これによって、彫刻作品と施設が合わさった美しい画像が来所者個々のSNSで発信・拡散され、全国のSNS利用者に価値共有されることで、「高知県の地域文化」のひとつとして地域ブランディングに寄与できている。

「彫刻作品に関連した参加型ワークショップの実施」では、設置されたレリーフ彫刻（写真16）のモチーフである葡萄の葉（コベル、エイトゴールド、富士の夢、シャルドネ、マルスラン）のうち、「コベル」と同じ形の葡萄葉型陶芸皿を筆者が事前に造形し、それに陶芸用絵具で絵付けをするという活動を企画した。このワークショップを通して、レリーフ彫刻のモチーフである葡萄の葉個々の造形にせまり、レリーフ彫刻をより深く味わうとともに、井上ワイナリーのいち醸造所が県内で独自に栽培する葡萄への理解を促し、地域農産物への関心を一層高め、来所者も一緒

になって地域芸術を考えることがねらいである。

2022年7月17日、「葉っぱ皿に絵付け体験」という企画名で井上ワイナリーのいち醸造所屋上において参加型ワークショップをおこなった。参加者は20名で、親子での参加が中心であった。陶芸用下絵具を使って自由に彩色し、その後レリーフ彫刻についての簡単な作品解説と、井上ワイナリーのいち醸造所が自社栽培するワイン用葡萄について話した。葡萄品種ごとに葉の形状が異なることに参加者は関心を示し、地域農産物への関心を高める点で一定の効果があつたと思われる。活動後は、絵付けした皿に透明釉薬を施釉して1220℃で酸化焼成し、後日参加者のもとへ届けた（写真17）。

今回は「コベル」を取り上げたが、今後は「富士の夢」「マルスラン」「エイトゴールド」などを順次取り上げ、同様の参加型ワークショップを定期的におこなうことで、設置されたレリーフ彫刻への多角的な鑑賞につなげ、当該施設を拠点とした地域芸術活動として定着させたい。

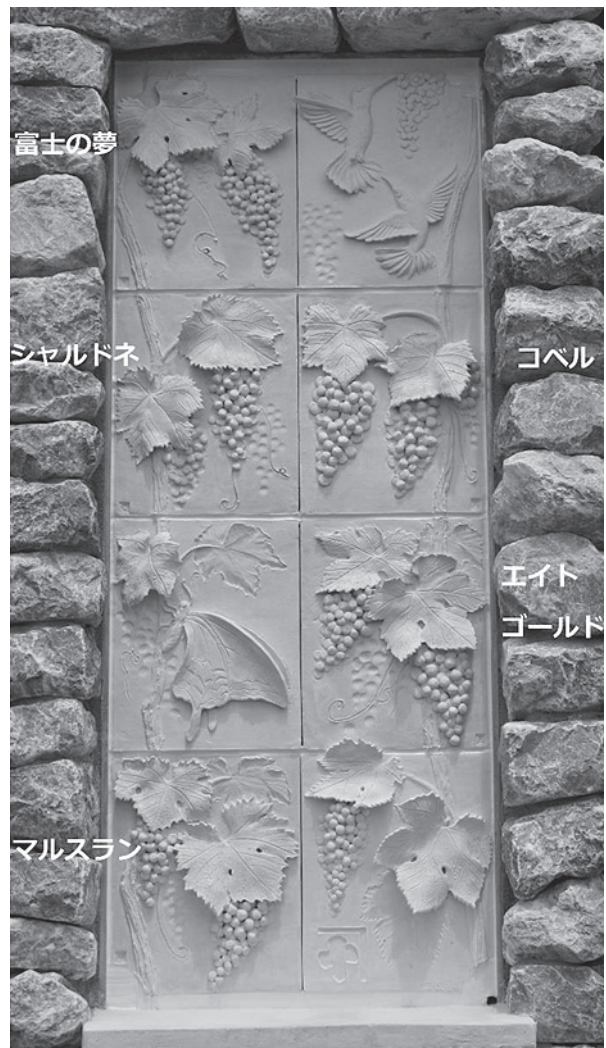


写真16 設置されたレリーフ彫刻のモチーフである葡萄の葉の種類



写真 17 彫刻作品に関連した参加型ワークショップ

## V. まとめ

井上ワイナリーのいち醸造所（写真 18）は豊かな自然にかこまれた小高い山の中腹に立地している。グランドオープンしてから季節にあわせて様々な景色に恵まれ、連日多くの来所者で賑わっている。地域の文化拠点のひとつとして、これから個性的な取組が期待される高知県の名所となっている。このような施設において高知県の文化振興に寄与すべく、筆者はレリーフ彫刻の制作と、その有用な活用方法について実践的に考察した。特に有用な活用方法については一定の効果が得られたと感じている。しかし、高知県の文化振興に資するためには、設置されたレリーフ彫刻の有用な活用が継続的に必要である。地域の文化として根ざすため、今後も当該施設においてワークショップを続けていきたい。



写真 18 井上ワイナリーのいち醸造所

## 謝辞

本研究では、井上石灰工業株式会社・井上ワイナリー株式会社代表取締役の井上孝志様、社員の皆様に多大なるご協力をいただきました。ここに感謝の意を表します。